

| |
|-----|
| 巻頭言 |
|-----|

「子どもに生きる」高度な専門性を備えた保育者の養成を

名古屋柳城女子大学

副学長 豊田和子

2020年4月に名古屋柳城女子大学こども学部こども学科が国の認可を受け、4年制大学の保育者養成の専門的機関として新たな一步を踏み出しました。このことによって、柳城学院は、4年制と2年制の両課程を有する保育者養成の専門的総合キャンパスとなりました。乳幼児期の子どもの保育・教育に携わる専門的人材育成機関として、これまで以上に大きな社会的責任を担うこととなります。「こども学部こども学科」は、冠名の示す通り「こども」を主軸にした養成教育を目指しております。昨今の子どもを取り巻く社会環境は、必ずしも子どもにとって最善とは言えず、健全な自然体験の不足、人とのかかわりの脆弱化、さらには児童虐待や子どもの貧困問題など克服すべき課題の前に立たされている現状であります。また、わが国では幼稚園・保育所・認定子ども園等の就学前児童保育施設は量的には増加しつつあるものの、保育士不足や待機児童問題が依然として解消されていない状況が続いております。そうした時代下に誕生した本学は、保育者養成を担う新たな機関として社会の発展に一層の貢献をなし地域の人たちからの期待に応えるべく大きな責任を果たすという使命を担うこととなります。子どもの保育、乳幼児期の教育の重要性を考えると、本学院の創設者のマーガレット・ヤング先生が残してくださった次のような詩が、こども学部の「子どもを学び、子どもに学び、ともに学ぶ」という理念に確固とした指針と大きな激励を与えてくれます。

| |
|--|
| <p>種蒔き マーガレット・ヤング 翼ひろげた天使が 愛と真理と光明との 種子をひと粒手に持つて 飛ぶのを止めて考えた。 「これが大きくなつたなら、 すばらしい実がなるように どこへ蒔いたらよいのだろ」 救い主さま、それを聞いて、 にっこりわらつておっしゃった。 「私のために、その種子を 子どもに心に蒔いておくれ</p> |
|--|

（『柳城学院百年史』2004の扉頁より引用）

本学院はキリスト教主義の教育理念「愛をもって仕えよ」の建学精神により、人格を磨き、神の愛に支えられて子どもへの愛の生業に励む人材を多年にわたり育成してまいりました。新しい大学においては「人びとと共に生き、人びとに仕える」という建学の精神によって、いっそう、愛を伴う創造力をもった保育者を養成していくことで、子どもたちの生活と成長を支え社会を革新していくような人々を送り出すことが期待されていると自覚します。

21世紀に入ってからの保育者養成の課題に目を向けますと、保育・幼児教育の量的拡充の課題から質課題にその重点が移ってきており、世界の先進国の多くが質課題解決の前に立たされています。保育・幼児教育の質はさまざまな側面から論じられるべきではありますが、なかんずく保育の質の大きなカギを握るのは保育者であり、養成される保育者の質にあるといっても過言ではないでしょう。この意味から、保育者養成の質は保育者の質確保と向上に、ひいては保育の質確保と向上に大きく連鎖する重要分野です。深い子ども理解に基づく、子どもへの愛に満ちた保育者の資質・専門性が求められています。

わが国では戦後の保育者養成の制度化とともに、今日までにたくさんの保育者養成機関（学校）が認可・設置されてきました。その結果、幼稚園教員養成の教育課程、保育士資格取得のための保育士養成課程が、実に多くの大学・短大・専修学校等で設置されています。全国の幼稚園教員養成課程認定校数は、平成30年度文部省教職員課調査によると621（大学院修士課程程度が約1.5割、大学が約4.4割、短期が約3.3割、通信課程）となっており、指定保育士養成施設数は、令和2年厚生労働省調査によると683（大学・短大の割合はほぼ同上、その他に専修学校等）となっています。この中の多くの機関が幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を取得可能な教育課程を提供しています。このように今日ではたくさんの大学・短大・専修学校等で保育者養成教育が実施されており、このこと自体は、すべての国民のために保育・幼児教育の向上を担う人材育成の活性化として有意義な傾向であるに違いありません。しかし、養成機関（施設等）で免許状や資格を取得した人が、そのまま保育・幼児教育の専門的職業分野に入職し従事しているかということ、その割合は決して高くないのが実情であり、毎年、全体の6割程度だと言われています。この背景には、多くの大学等では免許や資格は取得できるが就職は保育専門職分野以外のところを想定した学部・学科において養成課程を設置している現状に由来するのではないかと思われる。このことから考えますと、柳城学院の短大および本学は、もっぱら幼児教育・保育の専門職分野へ人材を供給することを教育の第一目標において、1898年の学院設立

以来、一貫して保育者養成に特化した専門機関として社会に貢献し続けてきました。私も、このことの歴史的意義を、新しく名古屋柳城女子大学こども学部こども学科の開学に際して、改めて強く再認識したいと思うのであります。

1898年にM. ヤング先生が手掛けられた保姆養成事業に始まり、「柳城保姆伝習所」(1910年)、「柳城保姆養成所」(1924年)、「柳城保育専修学校」(1941年)、「柳城女子学院」(1950年)、「柳城女子短期大学」(1953年)、「名古屋柳城短期大学」(1996年)というように、122年の歩みの過程で何度も校名を変えながら一貫して保育者養成の専門機関として今日に至っています。この間の保育者養成については、『柳城学院百年史』(2004年)をはじめ柳城短期大学紀要の諸号において本学院に貢献されてきた複数の先達(大江真道先生、尾上明子先生ほか)によってその歩みが解明されています。また『100年史の思い出』(1998年)を紐解きますと、そこには、卒業生の方々が私ども後続の者へ熱いメッセージを綴っておられます。この革新と蓄積の変遷過程は、本学院の建学の精神に基づき保育者養成の使命における不易のものと流行のものを調和的に包含しながら戦争や自然災害などの危機・困難に屈することなく、ひと時も絶えない養成教育と幼児教育の実践が持続されてきた大きな誇りであり、これからも継承していくべき道であると考えます。

歴史の中に問いの答えがあると言われますが、本学院が時代のニーズに先駆的に応え得るべく養成教育を実践し多くの保育者を世に輩出し続けることで社会からの信頼と人々の期待に応えてきたことの歴史的意義を深くかみしめながら、新しい大学のこれからの責務の重要性を確信する次第です。

保育者養成・幼児教育者養成に特化した高等教育機関としての柳城学院は、その教育課程(カリキュラム)においても実に主体的な開拓努力をし続けてきたことがわかります。この蓄積は、これからの大学の充実・発展に大きな励みとなるものであります。多くの養成校では、国の指示に従い、免許・資格に必要な条件を教育課程に具現化する傾向ですが、本学院では、教育課程全体の編成と科目設置においても、建学の精神に基づく保育者養成の実現に向けて創造的発想を生かして工夫するというよき伝統があり、名古屋柳城女子大学の教育課程にもこのことは継承されているように感じます。こうした、教育課程編成における主体的創造の力は、新しい大学の学生の学びの力に反映されていくものと確信します。名古屋柳城女子大学での養成教育は、今日および未来の子どもを取り巻く環境の革新につながるような質の高い保育者、人材育成を志向していくことが使命です。グローバル化と多様化が進む現代社会において、「世界的な視座に立って考え、隣人への共感と配慮

の精神をもって行動する世界市民としての教養」を身につけた人間像と「専門的職業人として成長し続けることのできる高い使命感と倫理観をもった」保育者像が調和的に具現化されていくことを志向した教育課程が凝らされていて、子どもに生きることで社会において貢献できる自立した女性を世に送り出すことが本学の任務であります。「人びとと共に生き、人びとに仕える」という見学の精神の具現化です。

M.ヤング先生も学ばれた幼児教育の始祖と言われるF. フレーベルは、今から180年ほど前に世界で最初の幼稚園を創設し、同時に保育者養成事業を開拓しました。当時の社会の中でしいたげられた子どもたちの生活を生き生きとしたものに蘇らせる幼児教育者という職業を考案し、歴史上に誕生させたフレーベルは「さあ、子どもらに生きようではないか！」と、子どもの生命革新に携わろうとしている人々・女性たちに呼びかけたのです。経済的に高度な発展を遂げ情報化が進展した現在社会においても、まだまだ、子どもたちの生活は生き生きとしたものとは言えず、さまざまな困難を抱えた子どもたちに十分な教育的まなざしが行きとどいていない状況であります。あらゆる子どもの幸せのために貢献できる人材育成が本学に課せられた使命でありましょう。フレーベルは、「生命の革新」という理想（1835年論文）について、「人間であること、神・自然及び人類に対する自らの本質及び関係において人間であること、人間であらうと欲すること」、「人間となること、人間であらうと願うこと、すなわち人間として自らの本質及び関係において発展させること」、「人間として生きること。すなわち公明正大に真実に、且つ明らかに感じつつ、思考しつつ、行動すること」を発表していますが、これからさき永きに亘って、名古屋柳城女子大学が、人間及び自然の生命、神の生命、子どもたちの生命・生活が調和的に実現される未来に向かって大きく前進していくことを願って教職員が一丸となって邁進していきたいと思えます。どうか、聖公会をはじめ、本学院の発展に貢献された方々、卒業生の方々、後援会の方々からの温かいご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。